まくらもと

水野仙子

義一を送り出してから、涼しいうちにと、汗になつたものゝ洗濯をはじめたが、途中で一寸痺れた足を縁側でやすめてゐるうちに、此頃の癖でぼんやりとなつて、これではならない／＼と思ひながらも、つひ小半時間經過せてしまつた。絞つた腕のものを竿に通す顏に、日は弱いながら眩しい位であつた。

お茂登はやう／＼濡れ手を前掛けで拭きながらあがつて來た。箪笥の上の鏡臺の前に立つて、こればかりは縮れ毛の伯母達に羨れる。搔いても／＼ぱらりと下る鬢の毛を搔きあげて居たが、ふと今日こそは一寸なりと坂町へ顏を出さずばなるまいと思ひついて、億劫さうに溜め息をついたが、稍々念入りに櫛の齒を入れはじめた。

やがて多くもない着物のうちから、銘仙の一寸したのを出して暫く考へて居たが、頷いたやうにそれを藏つて、引き出しをがたぴしいはせながら、下の方から縮みの浴衣をひきずり出した。去年一度水に通して、其まゝ藏つて置いたものである。糊の強いそれに手を通して、帶だけは色繻子の方を出して無造作に結んだ。

脱ぎ捨てをぐる／＼丸めて押入れに抛り込んで、再び鏡の前に來て襟を直す。根下り氣味の銀杏返しに、ふくらんだ胸の浴衣姿、我れながら大人氣になつたと思つた。足袋を履かうと出しかけたが、それも思ひとまつて、メレンスの風呂敷だけを出して錠を下した。火鉢の火を埋ける。臺所へ行つてあたりを見廻して障子をしめる。洋傘を袋から拔いてふりかへりながら玄關に出た。下駄も其處にある内側のへつた疊の汚れたのをつゝかけて、下りたつてみて心に微笑んだ。當て付けといふのでもないが、なんとなく伯母にかうした構はぬ身なりを見せてやりたいので。

出て見れば面白くないこともないといふやうな氣がした。買物のために電車の通りへ出ると、恰度お盆の十五日なので、下駄店小間物店呉服店、並ぶあらゆる店々は賑やかに飾りたてゝ提灯などをつるして、行き交ふ人の目をひいて居る。お茂登は砂糖の袋の戸板の上に並んでゐる、間口の廣い乾物店へよつて玉子を買つた。

去年まで前掛けしめてよく其店先にたつた、路次角の、青物店の、道を塞げて置かれた荷車の間を縫つて、曲ると直ぐに御支立物所の看板が目につく。洋傘をつぼめて石段を三つばかり登つて、格子のくゞりをついと押すと鈴が氣魂しく慓へて鳴つた。

慌てゝ奥から起つた足音がする。

「おや、お前かい」

面の長い叔母の目を受けて、お茂登は淋しい笑顔を見せた。
「お客様？」
一二足の美しい鼻緒の間に自分のを割り入れて上へあがる。
「子供達さ、お盆でね、お暑かつたらう」
「お六さん、なんだか焦げ臭いやうぢやないかね・・・・」
臺所に聲をかけながら、長火鉢の前に坐つて、
「よく出て來たね、隨分なお見限りだつてそいつてたのさ、はゝまアそんなに辯解しなくつてもいゝやね・・さうともさ、これで一軒の家を持つてからは・・あゝ／＼さうでなくちやならないんさ。あ、先日はありがとよ、あんなことしておくれでなければいゝんだのに、それでもあアよく氣が付いたつてお繁として笑つてたのさ。」
「ほんのおしるしばかり・・・・・・ほんとは私があがらなくちやならなかつたんだけど、此頃はなんだか何處へも出たくなくなつて・・・・・・」
「あゝ怠儀だらうね」
ひらりと目が帶のあたりに來る。
「あのお目出度うございました。男ですつてね、姉さんお丈夫なんでせう・・・・・・まアよかつたわね」
「あゝ有難う、思つたよりも輕くつてね、私もこれでやう／＼安心したのさ、そりやあ出てしまはないうちはどうなるものやら傍で第一心配なのさ、でも仕合せと曾惠がなか／＼氣丈だつたものだからね・・・まア肥立もよし・・・・・・そりやあ大きな子だよ」
と思ひ出してにこ／＼する。
次の間の簾戸のかげから、二人の女の子が固つて膝をつき合せて、時々お茂登の顔を見て、何やら話し合つて居た。その中の一人が、今お茂登と目を合せて、莞爾しながら首をさげたので、
「あら！おりんちやんね」
とお茂登もにつこりする。
「まあ／＼此人達は何をそんなに固まつて居るんですよ、おりんちやん、おさアちやん、飾りものに座蒲團を出したんぢやありませんよう、いゝ着物を着たつてそんなにすまさなくたつていゝぢやないか」
「あら、いやなお師匠さん」
「ホヽヽヽおさアちやんそつちへいらつしやいよ、私？私こゝがいゝことよ」
俄に女氣の一頻りさゞめき立つた。
「伯母さん、これ少しばかり姉さんにあげて下さいな私お産のお見舞ひつてどんなものがいゝんだかわからないんですもの・・・・・出ず入らずのもの・・・・」
お茂登は包みの玉子を、今女の子達が持つて來たものらしい、砂糖の袋などの並んだ、茶簞笥の前に持つていつて置いた。

「おや、またお前そんなことをして……困るねえ、お前んところからそんなことをして貰はうとは思つてないんだから……まア折角だから頂いて置くがね今度からはそんな心配しておくれでないよ、なんでも出來るだけつましくしなくちやいけないんだから」

片膝をついて茶道具を揃へながら、何事にも伯母は言葉が多い。

「姉さんこゝ？いゝでせうはいつても」

お茂登は次の部屋を指さして這入つて行つた。

「まア涼しさう」

腰障子を開け放して、狹い庭の青葉を一ぱいに吸ひ込む部屋に、新らしい手拭ひを鉢卷にして産婦は寢て居た。今の聲に心持ち顔を動かして、

「お茂登ちやん？」

とお茂登の笑顔を見あげて莞爾する。

「姉さんお目出度う……」

安心と矜りと嬉しさを包みきれぬやうに、産婦は再び嫣然とした。

「あら、あら、まあ」

眞綿を頭に卷いて、小蒲團にじつとしてゐる赤兒を覗き込んで、

「睡つてるの？まア可愛いのね」

「えゝ今やう／／眠つたとこ、お乳をやつたものだから……今つからなか／／やんちやなのよ」

「まあね」

「男なのね、おてがらだね姉さん、昨日の朝ねえ、雜布をかけて居ると珍らしく鹽町の伯母さんがすた／／はいつて來なすつたでせう、お茂登いよ／／出來たよ坂町へつていふんでせう、ぢやまあ男ですか女ですかつてそいつたら男だよつて、その男だよがさも／／男だよだつたんですもの、可笑しくつて」

「鹽町のをばさんはね、使ひをやると直ぐに飛んで來たんですよ……えゝ……痛み出したのは一昨日のお晝過ぎからなのよ、でもどうしても我慢がしきれなくなつたのは、さうね十時か十一時頃だつたでせうよ、をばさんの聲がした頃はなんだか夢中だつたわ」

「曉でしたつてね、今一先づ歸つて寢てくるんだつてそいつてゝよ、あん時」

ふと暫く話しが斷れる。お茂登はその時恰度、小さな腕でもつて勞かれるやうに覺えた胎動から、肉の塊りが息を吸つて聲を放つやうになるまでの、不思議な徑路を思ひやつて、腹のうちが揉めるやうな、妙な厭な氣持ちになつた。二つに折つて枕の下に當てがつた座蒲團の間から、脱脂綿の端の食み出て居るのにすら女で女の淺猿しさが感ぜられる。

「どうしたのよお茂登ちやん」

目を据ゑて赤兒の顔をみて居るので、かすかに胸を

搖つて産婦は笑ひ出した。
「もう帶はしたんでせう？」
いかにもやつれ氣のみえる鬢の後れ毛のあたりから目をずうと下へ這はして、思ひやるやうに靜にいつた。
「えゝ」
心持ち恥をふくんでお茂登は笑つた。
「暑いからなか／＼ひどいわねえ」
ぽつり／＼とした話の中へ、先刻の二人が先を讓りながら恐る／＼這入つて來た。
「さア／＼よつくごらんなさい、此人達は赤んぼが見たくて仕様がないんですとさ、おや、睡つてるのかい？」
賑かに伯母も續いてはいつて來たので、お茂登はずつと蒲團の裾の方に居去つた。
「へえいらつしやい」
と産婦から先に挨拶されたので、二人は溢れるやうな笑顔をして
「お目出度う！」
と其處に固つて座つた。
「あら？」
と遠くから覗き込んで、一人が振りかへると、
「まア可愛いことねえ」
「ねえ！」
と笑顔を産婦の顔から媚びるやうに師匠の目にうつす。その實どんなに可愛いかと思ふ心でみては、赤兒の赤く浮腫んだ瞼や鼻が案外に思はれるのだ。
「不思議ねえ」
と突然一人が笑ひ出した。
「何が……？」
「ホヽヽヽだつて……だつてその一昨日、いや先一昨日まで私等が來てたでせう、そん時までなんでもなかつたんですもの、不思議だわ、お腹ん中からこんな者が出るんですもの」
さういつておさアちやんといふが顔を赤くしながら笑つたので、
「またおさアちやんの笑ひ上戸」
と果てはみんなして大笑ひになつた。
「不思議つていへば不思議さねえ、ほんとにおさアちやんおりんちやんも、恰度お湯をつかつて居るところへ來て吃驚してるのさ」
「ほんとうに思ひがけなかつたんですもの」
「おりんちやんお盆で忙しかつたでせう」
「え有難う、今年は勝が居ないものだから、おつ母さんもお店へ出てるものだから……でもね」
「御免下さい」
くゞり戸の鈴が鳴つて涼しい女の聲がした。
「何誰？」

伯母が起つて行つたと思ふ間もなく、
「おやアまアこれは珍らしい」
「ホヽヽお久し振り、隨分お暑くなりましたね」
「まア／＼こちらへ、ほんとにお久し振りね、何日いらしやいました」
「今朝早く來たんですよ、實家へも隨分顏を出しませんでしたからねえ、をばさんお變りはなくて？えありがたう私はいつもこの通り」
「結構さね、私もね今年しやあもう弱るどこの沙汰ぢやないんでさ」
「さう／＼お曾惠さんがお産に出なすつたんですつてね、お目出度うござんした。今朝ね來ると直ぐに聞かせられたんですよ、で今一寸をばさんとこへもあんまり御無沙汰してたからつて出て來たところなの・・・・いゝえ、今日も宿つちや居られないんですよおつ母さんもたまには一晩位いゝだらうつてさういふけども・・・・・・」
耳を傾けて居た産婦は、この時やう／＼思ひ出したやうに、
「あゝお榮さんだよ」
と云つた。
つひ近くの陶器店の娘で、もとはやはり仕事を持つて一年ばかり通つてゐたことがある。押上の染物屋へ嫁いてから出入り三年になるがまだ子供がないから氣も若い。
「御免なさい」
お榮さんもやがて部屋にはいつて來た。背のすらつとした人で、形の大きい丸髷に結つて居る。
「おゝ皆さん今日は」
と手をついて、
「お曾惠さんどうなすつて？おめでとよ、あゝまあさうしていらつしやいさうして、いらつしやいてば、えゝ／＼もう私ですもの、そんな遠慮をしなくたつてよござんすよ」
「それぢや御免なさいよ」
と起きかへらうとした産婦はまた枕をつけた。
「えゝ／＼どうぞ御遠慮なく、あのなんですわね、大變お顏の色がいゝぢやありませんか、結構ですわ、ねをばさん、のぼせてるのかどうか知らないが、よすぎる程顏の色がいゝぢやありませんか」
といつもながら座をそらさぬ話ぶり、
「あれ／＼まアこんなに可愛いゝ子を生んで・・・・憎らしいことねえお曾惠さん、お上手だよ、男だなんてはじめつから」
「ハヽヽヽお榮さん羨しくなつたと見えますね、今に負けない氣になつて造へるさ」
と茶の間から伯母さんが調子を合せる。
「駄目よをばさん、私なんか・・・・・・」

「だつてそんないゝ體をしてさ、どこも惡るいところはありやしないんでせう、まあ／＼御覽なさい今にせい／＼肩で息をしてさ」
「ホヽヽヽさうだと有難いけどもね・・・私アもう諦らめてるわ、いつそ子供なんかない方が氣樂でいゝと思つてね」
「今つから！お曾惠だつてごらんなさい、さんざひとに氣を揉ませといてさ、ひよツこりと此樣ないゝ子を造へるんだもの」
「でもをばさん、私はいつまで經つたつて駄目！下手だから、ホヽヽヽヽ」
「ホヽヽヽヽお榮さんは」
お茂登はまだこんな話に交つて、笑ひ得る程世に馴れては居なかつた。廣くもない部屋に、産褥が塲所をとつて居るので、簞笥の金具に背を觸れて、先刻から袂の先を弄ぐつて居たが、つと起つて茶の間の方へ出た。
「伯母さん、なんかお手傳ひしませうか」
喋りながら起つたり居たり、伯母は頻りに小皿ものをカチ／＼いはせて居る。
「あゝさうだね、お前そこんとこからちやぶだいでも出しとくれな、おりんちやん達に今日は素麺の御馳走でもしようと思つて・・・・・・あゝそつちの座敷の方がいゝだらう」
お茂登の後姿を見送つてお榮は聲をひそめた。
「お茂登ちやんも出來たのね――」
産婦は頷いて笑つた。もうどの位？隨分見えるわね、義一さんはあのやつぱり番町の學校？」
「えゝ」
お曾惠はこの時ふと、姑とお茂登の間に流れて居る妙な具合の感情を思つた。
お茂登は九つの時からの孤子である。しかも戸籍の面は私生子になつて居る。相方の親達が不承知のうちに子供が生れて、悶着がきまらないうちに生兒の父親は急病で死んでしまつた。祖父祖母は田舍に行つたまゝ行衛が知れなくなつてしまふ。氣の弱い母に抱へられて、お茂登は九つまでさる華族の大きな邸宅で暮した。その年に全くの孤子になつてからは、二人の母の姉の家で、あつちに一年こつちに二年と、女中代りに養はれて來た。お茂登は去年十七であつた。さすがに胸は躍らしたが、そのまゝくる／＼丸めて置いた、「懷かしき戀しき御君へ」とした手紙が、或る日お茂登の袂から落ちたのを、拾つた祖母はふと或る目的をたてた。
會社の集金か何かに出かける隣りの老夫婦の座敷を借りて、毎日番町の學校へ出勤する若い教師があつた。子供々々した顏の人で、夏の夜はよくハーモニカを吹いて居た。日曜には友達になぞ誘はれて、洋杖を

持つて散歩に出かける姿をちらと見て、お針に來て居る若い娘達の噂にのぼつたこともある。手紙の主は原義一といふその人であつた。

お茂登が少しも感づかぬ間に縁談は大分進められて、間もなく、意外な結果に面喰ひ氣味な男のところへ、さして迷ひもせずに、邪魔者あつかひにされてるよりはと、お茂登は喜んで、嫁いて來た。夫といふ立派な楯が出來ると、何事によらず強味が出て、多少これ見よがしの仕打ちもあつた。それが伯母達には妬けもし、心外でもあり、やれこの頃は奥様氣取りですまして居るの、今日行つて見たらば、ちやんと机の前に坐つて本を見て居たのと些細なことまで數へたてる。行けば必と當てつけがましいことが出たから、お茂登の足は己づと伯母の家から遠ざかつた。

「さア／＼さア／＼おりんちやんもおさアちやんもこつちへいらつしやい、ね、お榮さんもつき合つて下さいよ、お盆の御馳走は素麺くらいのものさ、さ、そんなに愚圖々々してないでさ、私あ愚圖々々が大嫌ひぢやないか」

「お曾惠お前もお腹が空いたらね、今お粥を煮といたからね一寸待つてゝおくれ、なんだよお前疲れたら少し休むといゝよ」

「お茂登、お茂登、お茶は私が淹れるからね、お前もこゝへ來てお座りな、いゝよ私が淹れるから」

女連はちやぶだいを圍んでお茶を飲みはじめた。お茂登もたつて呼ばれたが、妙な癖でつまらぬ意地が出て、わざと其座を避けてまた枕許に据り込んだ。

「ねえ師匠さん、赤ちやんの名はまだなの？」

「あゝ名はね、靜岡のお祖父さんに選んで貰はうと思つて、非常に長生きした人だから、なんだつてお榮さん、今年はもう九十一になつたんだからね」

「へえゝ、あのそら畫を書いたつていふおぢいさんですか」

「え、さう／＼」

「赤んぼの名つて地震の搖らないうちに付けるものだつてね」

「ホヽヽヽおさアちやんいろ／＼なこと知つてますね」

「だつて私、おばあさんに聞いたんですもの」

「ホヽヽヽいゝわねえまだ此位のうちは……みんなもうお上手に縫えるでせう。をばさん今はこの人達二人だけ？」

「えゝ二人だけ。もうね孫でも出來てみりやあ手放せないことも出來ようし、どうしても教へ方がぞんざいになるだらうと思つて、預つてくれつて子が二人ばかりあるけれども斷つてやつたのさ、この人達はもとからのあれだからなんだけども……」

「お榮さんは知らなかつたらうかね、おさアちやんは

そらあのお捨さんの妹ですよ」
「あら、さう、ま道理で先刻から似てる／＼と思つてたわ、まあさうですか、へえ」
つけ／〻＼と顔を見られておさアちやんは眞つ赤になつた。
「お捨さんはどうなすつたか知ら、慥かなんでしたわね、高輪に居らつしやるんだつたわね」
「いゝえ、こんどあの品川へ越してよ」
「お捨さんも赤ちやんが出來ましたよ、お榮さん」
「まさう、みんな豪いわねえ、男？女？」
「女よ」
「早いものねえ、お捨さんお嫁にゆくのが厭だつてあの時泣いたつけ……」
「一度、さう／＼今年のお節句前でしたよ、赤ちやん連れて見えましたけどね、それは／＼痩せて、ねえおさアちやん、髪の毛なんぞ可哀いさうに拔けて／＼仕樣がないつてさういつてましたよ」
「まどうしてそんなに……」
「産後が惡るかつたんだつてさ、なんでも三月近くふさ／＼しなかつたつて」
「へえゝ」
「お産てものも怖ろしいものさね、棺桶に足を片方入れとくやうなもんだつてよくさういふから……まあ／＼うちのお曾惠なんかは輕くつて大仕合せ、私が八ケ間しく言つて働かせときましたからね　」
「あのなんですつてね、懷妊した人は體を動かした方がいゝんですつてね」
「えゝ／＼そりやあね、あまり重いものを持つたり、手を上げ下しするやうな仕事こそ惡るいけども、體が重いに委せてのらくらしてるのは一番いけないんですよ、昔からさういひますからね、だからお曾惠なぞも酷い姑だと思つたか知れないけれど、それが誰れの爲めでもない、みんな自分の爲めなんだからね、私が宗吾を生む時なざあ、つひ生れる二三時間前まで山のやうな冬物の洗濯をしてたものでさ、家内が大勢でしたからね、そりや八ケ間しいお姑さんだつた」
お茂登の胸には犇々とあるものがあたつた。私に聞かせるためにあんなことをいふのだなと思ふと、齒ぎりしたい程なんの譯でもなく口惜しくなつて來る。常でない體になつてからは、時とすると多愛もなく躁いで、夫に甘へかゝつてみたり、さうかと思ふと着物の褄が思ふやうに縫えないといつて、焦慮て／＼袂を嚙んで涙さへ溢して居る時がある。そんな時には我身をよそにして人が憎まれてならなかつた。「私が好きでかうなつたのではない」と叫んで、世の中の男といふ男を呪つてやりたいやうな氣がした。

隣室（となり）の話しに耳を傾けて、時々に微笑みを洩らして居た産婦は、波紋のやうに寄せてくる疲勞（つかれ）に、知らず／＼弛（ゆる）んだ瞼を閉ぢて、やがてすう／＼と幽（かす）かな寝息をたてはじめた。

其枕許（そのまくらもと）に、お茂登は唇を嚙んでつくねんとして居たが、安らかに息をひく寝顔をみまもつて居るうちに、何處ともなく獨り殘されたやうな頼りない淋しさを覺えて、思はずハラ／＼と冷たい涙を溢（こぼ）した。

【入力者注】

※底本は総ルビですが、ルビは一部にとどめました。

※以下の修正を施しました。

憶却→億劫

並んでゐる。間口の廣い→並んでゐる、間口の廣い

なんだか焦げ臭いやうぢやないかね……→なんだか焦げ臭いやうぢやないかね……」

おや、またお前そんな→「おや、またお前そんな

結構さね、→「結構さね、

廣くもない部屋に。産褥が→廣くもない部屋に、産褥が

若い教師があつた子供→若い教師があつた。子供

産後が惡るかつたんだつてさ、→「産後が惡るかつたんだつてさ、

憎まれてならなかた。→憎まれてならなかつた。

底本：「女子文壇」明治四十二(1909)年十一月號
テキスト入力：小林　徹
公開：令和三年五月二十六日
リンク：水野仙子ホームページ